薩摩琵琶の試作研究

末吉光男　鮫島正登美
楠畑祐也　飯田正毅

〔目　的〕

薩摩琵琶は古くから日本に伝来していた盲僧琵琶を始祖とし，幾多の変遷をへて現在の姿になったといわれている。旧藩制時代から明治を通じて，徳育，士風の振興娯楽の分野において民衆の心にとけこみ深く喰い入っていた。

戦後は琵琶が衰微した為に製作者も姿を消し，僅かに高齢の技術者2～3名を残す状態である。

この時点において，その製作技術を伝承しておかねば遂には薩摩琵琶の廃絶も考えられるので，これの製作についての試作研究を行ったものである。

〔概　要〕

現在唯一人の製作技術者として生産を行っている，薩摩郡入来町麓の吉岡氏を訪ねて，その製作技術を調査した。古来琵琶の材料としては，男性的な音調を尚ぶ為に梅，桑，桜，欅材を使用し，撥材としては，ツグの木を使用した。現在では良質材不足の為に，ケヤキで製作している。胴面の成型には木製の木型を用い，それらの接着，加工等については相当の熟練さを必要としているようである。

薩摩琵琶はその製作者によって各々特色があり，現在するもののうち有名なものは，伴殿の琵琶及び甚兵衛琵琶がある。

製作に当っては，これらの琵琶の数点，及び東京製の琵琶一点並びに吉岡氏が現在製作中のもの等を参考として，伝統的な寸法によって設計図を作製した。

材料はケヤキ材を用い，人工乾燥を充分に行ったのち近代的な加工用具を使用し切削加工を行った。

成形には集成材による治具を用い，煮沸軟化せしめた部材を使用し，接着には，エポキシ系の接着剤を使用した。エポキシ系のものを使用したのは，乾燥不充分の胴部材をそのまま接着せしめる為である。

柱及び覆手，半月等は従来，象牙，鹿角等が使用されていたが材料入手難の為に合成樹脂を止むなく使用した。

完成したものについては，専門弾奏家に依頼して弾奏して貰ったのであるが優秀なものであるとの辞を得た。

薩摩琵琶同好者の中にも，これが製作を行い度いとの意向もあり，その人々の参考資料としても充分貢献出来る資料が得られた。

尚市内在住の塩田氏が薩摩琵琶の製作に従事し，当場の資料を参考として薩摩琵琶製作の技術を伝承してゆくようになった事は，貴重な成果であった。

竹編組による陶器への加飾研究

大西　洋

〔目　的〕

本県は昔から屈指の竹材県といわれているが，マダケ林は近年開花，枯死等により荒廃しつつある。しかし一方竹製品の需要はめざましく伸展し，画期的な振興策が熱望されているおりから，竹材の高度利用を図るため，竹編組と薩摩焼きとの組み合せによる表面加飾について研究し，試作を行った。

(2) 方　法

マダケ独特の靱性と弾性を，また割り白籐の純白で清潔な感じを生かし，各々の器物に適合した編組法を考慮して，編組を進めた。

(3) 立体編み込みの構成

陶器に編み込む場合の曲線の変化は，竹の材質の弾性，強度に左右されるが，それには竹のヒゴ巾と厚さの決定が重要であり，陶器に編み込む場合のヒゴの厚さとしては，0.2m/mから1.0m/m位まで，またヒゴ巾は，3m/mから10m/m位までが最も適しているので，この範囲で陶器の大きさと形態を考慮して巾と厚さを決定した。

(4) 試作品と編組法

(1) 鶴首花器　白さつま編み込み　二種
2m/m白籐　高 29cm　ござ編み　二間網代編み